



鶴岡市 / 羽黒山五重塔

# 謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします  
本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

 庄内銀行

Cradle

冬号

出羽庄内地域文化情報誌「クレードル」

令和7年1月1日発行  
2025 Winter vol.85

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイン] 電話0234(64) 0888  
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コソツ・コミュニケーション] 電話0234(41) 0012

語られる言葉に映る、山と、人の生き方

# Cradle

冬号

vol.85  
2025 Winter

出羽庄内地域文化情報誌 [クレードル]

特集

## 山にまつわる 聞き書き

ご自由にお持ちください  
TAKE FREE





左内への手紙  
[3通目]

# 鶴岡シスターズ

エッセイスト

酒井 順子



第31回赤川花火大会(2024年8月17日)

鶴岡出身の友達が二人います。私は心の中でひそかに「鶴岡シスターズ」と呼んでいます。が、とはいえ彼女達は姉妹ではなく友人同士。共に故郷を離れ、都会で働いています。私が鶴岡へ行くたびに思うのは、「穏やかで心やさしく、会うたびに温かな気持ちになる鶴岡シスターズは、この地が育んだのだなあ」ということなのでした。

数年前には、シスターズにいざなわれ、赤川花火大会を訪れました。シスターズの一人のご実家に泊めていただくことになった私は、がっしりとした造りの広大な農家のお屋敷に、まず歓声をあげました。ご家族とお話をして、いと、初めてお邪魔したお宅だというの、自分の実家に帰ってきたかのようにリラックスしてきます。

「じゃあそろそろ」  
と花火大会の会場へ向かうと、シスターズが案内してくれたのは、河原を升目状に仕切った席。レジャーシートを敷いて、  
「かんばーい！」

と冷たいものを飲み、だだちや豆などをつまみながら、夏の日が暮れるのを待ちました。いよいよ花火大会が始まると、その迫力や色鮮やかさに圧倒されます。声にならない声をあげていると、

「酒井さん、寝っ転がってみて」  
と、シスターズ。

えっ、いいの？と思いつつ、レジャーシートの上に横になると次の瞬間、今まで見たこと

のない絢爛豪華な世界が、視界に飛び込んできました。

当然ながら、寝転がった状態で花火を見るのは初めてだった私。フルフラット状態で花火を見上げると、色とりどりの花火が、まるで五体すべてに降りかかってくるかのようにではありませんか。

「これはすごい！」

と叫び声をあげると、シスターズも、

「ふふふ、そうでしょう」

「これがおすすめの見方なんです」

と、フルフラットで夜空を見上げています。私たちはそれからしばらく、無言で寝転がっていました。シャワーのように降り注ぐ花火を、眼だけでなく、全身で受け止め続けたのです。

たまにむくつと起き上がってだだちや豆をつまめば、この時間がとてつもなく贅沢なものであることが、しみじみと感じられました。夏の夜の甘い空気。美しい花火。止まらないだだちや豆。そして、このようなもてなしをしてくれるシスターズとご家族の、温かな気持ち。すべてに包まれて、私は夜空に舞い上がるかのような気持ちになったのです。

やさしい人とおいしい食べ物を生み出す鶴岡の土の上に寝転がることによって、私にも何か沁みこんでくればいいな。…花火大会から帰る道すがら、そんなことを思っていた私。今も鶴岡に行くたびに、地面にごろりと寝転びたくなるのでした。

さかい・じゅんこ | エッセイスト

1966年東京生まれ。高校時代より雑誌にコラムを書き始める。大学卒業後、広告会社勤務を経て、執筆に専念。2003年に発表した『負け犬の遠吠え』がベストセラーとなり、婦人公論文芸賞、講談社エッセイ賞をダブル受賞。近著の『消費される階級』『老いを読む 老いを書く』の他、『日本エッセイ小史』『女人京都』『うまれることば、しぬことば』『百年の女』『婦人公論』が見た大正、昭和、平成』『家族終了』などの著書多数。『枕草子』の現代語訳も手がけている。



# 山にまっわる 聞き書き

## 特集

山で暮らす、あるいは山をフィールドに活動する人と話すと  
元来、人はどう生きてきたのかを知って目を見張ることがあります。  
「山」という、恵み多く、美しく豊かで、恐れ多い存在を前に、  
人はともに生きようと、多くの技術や知識を得てきました。  
語られる言葉に映る、山と人の生。そこには  
生きる、生活する、という活動の源泉があるように思えるのです。



「特集」  
山にまつわる  
聞き書き

# マタギとして 山を生きる生業

工藤朝男さん・工藤昭子さん



工藤朝男／昭和12年、大鳥生まれ。6人兄弟の次男。鮮魚店での修業を経て、大鳥に「工藤朝男商店」を開店。商売の傍ら、動植物の狩猟や採取を生業とする。マタギ文化研究会顧問。「ブナ林と狩人の会：マタギサミット」(主宰幹事・田口洋美)に多数参加し、鶴岡市での開催時は実行委員長も務めた。

工藤昭子／昭和16年、大鳥生まれ。19歳で朝男さんと結婚。商店の仕事しながら一男一女を育てる。朝男さんがマタギを始めてからは主に店に立ち、合間で山菜採りなどに励む。工藤家には直会の場として猟師が集うことが多く、仕事に家事にと何役もこなした。



## 「店

を始めた20代半ば頃、近所

の爺さんが毎日のように来て喋るわけ。明治生まれの山育ちの人で、山のすばらしさ、自然のすばらしさを。話聞いてるど、爺さんは動物なり植物なりを同じ目線で見て、対話してるんだ。熊獲りでも山菜採りでも、これが山で生きるってごどがど。そういう生き方もあるんだなって思った。朝男さんの父と兄は鉾山に勤め、ご自身は子どもの頃からウサギやイタチを獲って家計の助けにし、山菜やきのこを採っては家族の糧にしていたといひます。「大鳥中

学校を卒業しながら親戚の鮮魚店で修業して、ダム工事が始まるがらって大鳥で店を構えだんだ。大鳥は高いの場で、ゆくゆくは他所への転居を考えていたそうですが、「この人が、春の芽吹きど秋の紅葉がいいがら町さは行がねって言ったんだ」と昭子さんは朝男さんを見て笑ひます。「芽吹き見れば長い冬も何もかも忘れる。自然の中に生きでるどそういう心持ちになるんだがもな」。

長い冬の間、心待ちにした春。

大鳥の春は熊狩りから始まります。「マタギをやる人はその時期なっどみんな落ち着がねんだ。『熊いだ』なんて聞くと、どれどれ！って。熊の猟期は4月中下旬く5月初旬。巻き狩りといひって、狩場となる一山を数名で囲み、大声で熊を追い込む「勢子」と、高い場所から銃で仕留める「待手」に分かれて熊をします。朝男さんは81歳まで50年近く狩猟を生業とし、熊狩りでは「舞方(前方)」といひられる指示役を長く務めました。時にスノーブリッジや雪崩などの危険も伴う中で、熊の動きをとら

え、全員で臨む熊狩り。危険な目に遭っても毎年行かすにはいられないのだといひます。「台風だって何だって行くんだもの」と昭子さん。それでも、身内に不幸があつた時や妻が妊娠中など山に入るのを避ける日という言い伝えもあり、昭子さんが出産を控えて朝男さんが猟に出た時は、10日ほど熊が獲れず、気を揉んだこともあつたそう。熊狩りの猟期はちようど山菜採りや農作業などで慌ただしく、人手が要る時期。それでも男性たちを山に向かわせるのは、熊がそれほど価値が高く生活の糧であつたこと表れです。

12月12日の「山の神の日」。猟師たちは1年の無事に感謝し、翌年の安全を願ってお神酒を捧げます。そしてまた春が来て4月12日、山の神に祈り、猟が始まります。狩猟や採取の技術、地形や地理、生態などの知識、そうした「知」を通して自然との付き合い方を教えてくれるマタギの存在。「若い頃に爺さんから山でも暮らせることを教わって、良がったが悪かつたがは今となつてはなんとも言えねどもな。でも後悔はしてね。十分楽しんだっていうが、人生には悔いが無い」。

「命に感謝し報いる。山の、自然の力をもらってな」(朝男)  
「大鳥は人が身近で、付き合いが濃いのがいいところ」(昭子)

(上)熊を探す朝男さん。春～初夏は山菜採り、秋はきのこ採り、冬はウサギ狩りと、山の1年は早く過ぎていきます。(下)お店を始めて60余年。今も朝男さんが採ってくるきのこ類を求めて訪れるお客さんが多くいます。[写真提供=田口比呂貴]





「生涯楽しく滑り続けて良いスキーヤーになってほしいです」(三郎)  
「父は私のスキー教師のお手本です」(浩司)

**月** 山・湯殿山の山間にある鶴岡市田麦保。プロスキーヤーとして活躍する渡部三郎さんと浩司さんは、この山里で生まれ育ちました。「私が子どもの頃は、冬になると家の中は雪囲いで日中でも真っ暗で。外は雪で明るいから、暗くなっても親が炭焼きから帰るまでずっと外灯を頼りにスキーで遊んでいました。手作りの木製の板でどうやったら誰よりも早く、高いところから滑れるか、夢中で滑っていましたね」と三郎さん。

俣分校に通う児童は全員スキースポーツ少年団に入団し、昭和56年にオーブンした湯殿山スキー場でスキーをするようになります。「放課後になると週に3回は学校からスキー場にマイクロバスが出ていました。あの頃はナイターもやっていたので、母が迎えにくるまで弟2人と夜まで滑って。楽しかったです」と浩司さん。

(上)スキーブーム時代にトップを走り続けた三郎さんは「サブちゃん」の愛称で親しまれ、数々の本が出版されました。(下)浩司さんは県屈指のトップスキーヤー。夏場は庄内浜などでSUP指導も行っています。



物心ついた時から冬になると当たり前のようにスキーをしていた2人は、それぞれがスキー推薦で高校に入学し、卒業後はスキー場でインストラクターをしながら大会に出場。三郎さんは30歳と31歳で全日本スキー技術選手権大会の連覇を果たし、日本トップのデモンストレーターとなりました。

40歳で選手を引退してからは、全日本スキー連盟の役員として大会本部運営へ。三郎さんと入れ替わるように出場し始めた浩司さんの姿を、同じ場で20年以上見つめてきました。「息子たちのスキー指導をすることはなかったですね。忙しくてあまり家に帰れなかったこともありすが、親が入るとあ

まり良いことがないので(笑)。その浩司さんも令和6年3月の技術選で選手を引退しました。「浩司は私より長く選手を続けてきましたが、本当の意味でスキーが上手くなるのはこれからです。どんな良いスキーヤーになっていくと思いますよ」。

ナリンが出る」と声を弾ませるのが、「新雪を滑って布団のトラランポリンのような体感を得た時」。4月から始まる月山スキーでは、2人それぞれに毎年ツアー客と一緒に月山から湯殿山スキー場までの雪山を大滑走しています。「私たちがとつての本番はスキー場ではなく、山がまるごとゲレンデになる月山です。月山スキーがあるおかげで2カ月以上長く滑られる。山形は恵まれた地だと思いますね。ただただスキーが好きで、その感動や楽しさを多くの人に伝えたいと滑り続ける2人は、これからも山形、日本のスキーをけん引していくに違いありません」。



現在三郎さんは湯殿山を拠点に全国の講習会に招かれて、スキーを安全に楽しく滑る指導をしています。浩司さんはフリーランスで冬はスキー指導とツアー企画を、夏は海でSUP指導を行いながら、「自然体験アクティビティを通じて感動や心の豊かさ」を提供しています。その浩司さんが「アドレ

「特集」  
山にまつわる  
聞き書き

## 遊びも仕事も 雪山をフィールドに

渡部三郎さん・渡部浩司さん



渡部浩司／鶴岡市在住。日大山形高校スキー部出身。平成12年から白馬八方尾根スキースクール所属。平成19年から湯殿山スキー&スノーボードスクール所属。平成31年、FWQ HAKUBA8位、全日本スキー技術選手権大会12位。同年独立。「コジプロ」として指導やツアー企画などを展開中。



渡部三郎／鶴岡市羽黒町在住。昭和61年と62年、全日本スキー技術選手権大会で連覇を達成。昭和62年公開の映画『私をスキーに連れてって』で三上博史のスキー吹き替えを一部担当。全日本スキー連盟役員などを歴任し、現在は湯殿山スキー&スノーボードスクール校長を務める。





「特集」  
山にまつわる  
聞き書き

# 山で遊び、山での 身の置き方を学ぶ

土門敦さん・佐藤暁子さん



佐藤暁子／鶴岡市在住。フリーアナウンサー。スピーチトレーナー。昨年3月号まで本誌「おかあさんのさじ加減」を担当。自然の理に従う生き方の追求から、令和3年に仲間と「ミチノクの薬草魔女プロジェクト」を発足、代表。山や植物の知恵を食や商品開発を通して伝えている。

土門敦／庄内町狩川在住。北月山アドベンチャーくらぶ「自然冒険塾」代表、北月山荘を守る会会長、庄内町ボランティア連絡協議会会長。自然分野だけでなく、庄内町芸術文化協会副会長、日本九重流詩吟庄内町詩吟愛好会副会長、庄内民話の会代表など文化面でも活躍。



## 冬

は全長約80mもの雪の滑り台でソリ遊び、春は残雪下

レッキングと山菜採り、夏は鶴巻池でカヌーをしてキャンプ活動、秋は採ったきのこでアウトドアアクッキング。月に1度、月の沢温泉「北月山荘」を拠点にさまざまな自然活動をしているアドベンチャーくらぶ「自然冒険塾」は、代表の土門敦さんが令和2年に立ち上げた庄内町のスポーツ少年団。今年度は町内外の小中学生22人が参加しています。「以前は地域の小中学生に陸上競技を長く指導していましたが、山で子どもたちと自然遊

びをしたいとずっと考えていました。自然の中で遊ばせた方がたくましくなるし、圧倒的に人間としての成長につながりますから」。

土門さんが北月山荘に関わるようになったのは平成17年。余目町と立川町の合併によって存続が危ぶまれた北月山荘で、地元のお母さんたちの料理を提供する食堂を試験的に始めてからでした。その後、北月山荘周辺の環境整備に着手。仕事やスポーツ指導の合間を縫って、荒れた雑木林に機械を持ち込み、山野を拓く開墾作業に1人コツコツ取り組んできました。「いらぬ木は切り、必要な木は残す。自然を守りながら人間と野生鳥獣との境界を築いていく。その辺りの判断力や知恵は、やりながら体で覚えました。山で活動をしていると、頭で考えなくても体が勝手に動く、瞬時の判断力や野生的なバランス感覚が身につきます。それを子どもたちに伝えていきたいですね」。

「土門さんからは、山での身の置き方を学ばせてもらっています」と話すのは、自然冒険塾にお子さ

んと参加していた佐藤暁子さん。自らも令和3年5月に仲間と「ミチノクの薬草魔女プロジェクト」を立ち上げ、月山の野草を通して、先人が紡いできた薬草の知恵を伝える活動をしています。「コロナ禍で活動が制限された時期によく1人で山に入っていたら、感覚が解放されて自然と一体になる体験をしたんです。みんなもつと山に入れば生きるのが楽になるのではと活動を始めました。ただ自分の知識や知恵だけでは、山に入り込む活動に多少の不安があつて。ちようどその頃、土門さんとさまざまな話をするようになった暁子

さんは、山から多くを学ぶ中で、見返りを求めず、山に深い敬意を抱きながら動き続ける土門さんの姿に感銘を受けます。「塾の子どもたちに対する温かくて大きな視線もそうですし、土門さんは私の山の師匠です」。

現在、土門さんは地の利を生かした野草園を北月山荘周辺に作るべく、日々山の整備活動が続いています。暁子さんも出羽三山の野草料理を各地で提供するなど積極的に活躍中です。「山に入るとやりたいことがどんどん増えてきて」そう笑顔で話す2人の背景で、初冬の月山が輝いていました。

(上)11月の自然冒険塾では藍染め、薪割り、星空カフェなどを1日で体験しました。(下)11月に鶴岡のエビスヤビルで「ミチノクの薬草魔女まつり」を開催。マルシェやワークショップに多くの参加者が集まりました。



「山遊びは人間的な成長につながります」(土門)  
「山に入ると日常とは違う感覚が開くのが心地良くて」(暁子)



「熊狩りで1年が始まる。人間の活動が始まるなやの」(征勝)  
「大鳥の人はみんな一生懸命。山菜採りでも何でもな」(ゆき)

「今」 ちょうど紅葉がいい時期だぞ」旅館朝日屋を営む佐藤征勝さんとゆきさんにそう聞いて、11月初旬、鶴岡市大鳥を訪れました。

四季のブナ林に彩られて峰々が続く朝日の山々。その真ん中にある大鳥集落で、朝日屋は昭和28年、磐梯朝日国立公園の指定をきっかけに征勝さんの父、義三郎さんが開業しました。当時から溪流釣りや登山を楽しむ人たちが多く訪れ、昭和30〜50年代の登山や釣りのブームで車中泊がかり、連日大いにぎわったといえます。



征勝さんが朝日屋を継いだのは37歳の時。同時にお父様から登山道の「大鳥池避難小屋(タキタロウ山荘)」の管理も任せられました。「小屋番と登山道の整備もしてな。

昔は尾根や沢伝いにも道があつて、ぜんまいどがきのこを採るのに自分たちで整備してあげや」。山小屋はタキタロウ伝説で知られる大鳥池のほど近く。以前大々的に行われたタキタロウの生息調査にも参加した征勝さんの「タキタロウ講話」は山小屋の名物です。「うちの親父は商売人気質だったから、山の仕事はがむしゃらにはしなかつた。だがぜんまい採りもきのこの採りも自分で覚えだ。ぜんまい採りの場所は険しぐでな。一番の収入源だけでも今はなかなか採る人がいなくなつた」。

春の山菜、秋のきのこ、その恵みの味を楽しむに多くの人が訪れる朝日屋。あく抜きや塩蔵、乾燥といった食用の知恵を生かして山菜料理を作ってきたのがゆきさんです。「今日はあのお客さんが来るからあの山菜採ってきて食べさせてなあって。おいしいって喜

(上)11月にタキタロウ館で行われた感謝祭は征勝さんが実行委員長。子どもも大人もイワナ釣りを楽しみ、その場で焼いて味わいました。(下)わらび、どんごえ、ふき、菊など、保存食材も生かした旬の味。手間が光る心尽くしの料理です。



んで食べてもらわれんなが一番楽しい」。大鳥に生まれたゆきさんは、征勝さんが村長の務めをした

り山の仕事をしたりする間、旅館を切り盛りしてきました。「朝日屋の料理は登山者さまも有名でのこの人(ゆきさん)は、山菜採り行つても素早くで俺の倍も採る」。そう笑う征勝さんは3年前にマ

タギを引退。ゆきさんは振り返って話します。「朝日屋は熊狩りの無線の音が入るなや。『ほら行つた!』『走れ!』って聞いてで怖ぐでや。危なぐで行がせだぐなぐで。今は息子も行くようになってな。男の人たちは好きなんでもな」。猟期は4月中下旬頃から。熊狩り

に行かないと1年が始まらない、と征勝さん。「我々はその頃に活

動が始まるなよ。人間の活動がな。熊狩り行つて高い峰さ上がつと、木の芽吹きが下からだんだん上がってくる。まるで芽吹きが動いでるようでや、あれはすばらしいもんだ。狩りに行つて見える風景は、勇壮で雄大なな」。

征勝さんの山の語り部、ゆきさんの山のごちそうを味わいに、各地から人々が足を運ぶ朝日屋。「冬でないときできない仕事がある」というゆきさん。冬越しの間、宿は次の季節への支度を進め、やがて河原のネコヤナギが膨らみ始める春へとその時間は続いていきます。

## 「特集」 山にまつわる 聞き書き

# 山の生活を知る 山のよりどころ

佐藤 征勝さん・佐藤 ゆきさん



佐藤征勝／昭和18年生まれ。両親は山形県出身で東京に暮らし、征勝さんが生まれるとすぐ疎開して大鳥へ。庄内交通のバスの運転手を15年ほど勤めた後、父の義三郎さんから旅館朝日屋と山小屋の管理を引き継ぐ。村議や市議を歴任し、朝日村の最後の村長も務めた。

佐藤ゆき／昭和22年、大鳥生まれ。6人の兄を持つ末っ子。大鳥中学校を卒業後は家事や農作業を手伝い、針仕事を習い、一時鉾山の診療所にも勤務。22歳で征勝さんと結婚、2男をもうける。山菜採りが好きで、その料理の腕にも定評あり。現在のご長男夫妻も一緒に朝日屋を切り盛りしている。





幕末から明治を生きた学者、松森胤保の大著『両羽博物図譜』には、当時目にした鳥や植物が見事な観察力と筆致で描かれています。胤保さんとともに、庄内の今この季（とき）へ。

季語——しやうかん

# 小寒

小寒の空猛禽の突き割るーあべ小萩

寒空を飛ぶコハクチョウの姿を眺めては、深まる冬を感じるこの季節。俳句で「渡り鳥」は秋の季節で、秋から冬に渡りをする鳥たちが庄内でも多く見られます。

『両羽博物図譜』で最も多く頁を割いた「禽類」（鳥類）。中でも特に松森胤保が好んだとされるのが「猛禽類」といわれています。クマタカのように庄内にすんで渡りをしない「留鳥」の他に、シベリアなどから長旅をして渡ってくる「冬鳥」と、比較的に見つけやすい鳥からなかなか出会えない鳥まで、幅広く記録しています。

なぜ胤保は、これほど微細に猛禽類を描いたのでしょうか。それは鳥の羽根を矢羽とした用途があったにせよ、崇高で勇猛な姿が、武士である自身と重なるところがあつたのかもしれない。



フクロウ目も詳細に描いている。地元で捕えたものや、鳥屋や魚屋で剥皮を買って描いたものも。図は、夜行性のフクロウの中で日中も活動する冬鳥のコミミズク。

※ ワシやタカ、ハヤブサの仲間のこと



冬鳥の観察では初級編といえる「オオワシ」は図譜に「大鳥」として書かれ、同じく毎年渡ってくる「オジロワシ」は「小鳥」として収録されている。



角鴞鷹 羽長二尺三寸  
重六十八匁  
長一尺五寸  
内尾八寸長長物也  
中五又五寸  
内尾一尺二寸五分  
足八寸五分

## チュウヒの仲間

庄内には越冬地まで渡る際に一時的に滞在します。足が長くスリムな体つきは、草丈の高い葦原の生息環境に適応したためです。フクロウと同じ「顔盤」という顔のつくりはパラボラアンテナのような集音の役割を持ち、獲物を見つけない葦原で、聴覚も使って狩りをしています。



「腰白」と書かれた上の図はハイロチュウヒのオスの成鳥を描いたもの。「生態を熟知した者でなければ描けない生き生きとした姿」と動物学者の磯野直秀さんが絶賛。

## 寒鰯とハタハタ

3 尾並んだ一番上の魚が寒鰯（マダラ）のようです。庄内では寒の時期に旬を迎えることから「寒鰯」と呼ばれ、図譜にも「寒中が盛り」とあり、深海に生息することも記されています。左は「地ハタハタ」の名で、明治18年12月20日の日付が添えられています。大黒様のお歳夜の伝統食でもあるハタハタも寒鰯も、庄内の冬の味覚の代表格です。

寒鰯の記述からは、干鰯として保存食にもしていたことが分かる。



低空を素早く飛ぶハイロチュウヒ



写真提供=ともに長裕裕紀

俳句11月の匡同人 あべ小萩（俳人協会会員）  
参考資料『磯野直秀解説「鳥獣虫魚譜」』『両羽博物図譜』の世界（八坂書房、1988）  
協力『酒田市文化資料館光丘文庫、猛禽類保護センター鳥海イヌワシみらい館、（一社）鳥海山・飛鳥シオパーク推進協議会』